

報告**ハンガリーの外国語教育からの日本への示唆****—中高一貫ギムナジウムの英語バイリンガル・プログラムの視察から—**

Observation Report on English Bilingual Classes of Hungarian Gymnasium

飯田深雪

IIDA Miyuki

1 はじめに

ほかの中東欧の国々とともに2004年に欧州連合(European Union, EU)に加盟したハンガリーは、EUの多言語教育の理念をもとに外国語教育に力を入れてきた。1989年の社会主義体制崩壊後、国民が、ロシア語に代わって、英語を中心とした外国語への学習意欲を急速に持ち始め(1980年は、9パーセントのみが1つ以上の外国語を話していたが、2012年にはその数が35パーセントに増加した。)近年英語教育の分野で著名な研究者も輩出している。

ハンガリーはまた、中央ヨーロッパで、オーストリア、スロヴァキア、ウクライナ、セルビア、ルーマニア、クロアチア、スロヴェニアという7か国に接しているにもかかわらず、ドイツ語圏のオーストリア以外の6か国など近隣諸国で話されているインド・ヨーロッパ語族のスラブ言語ではなく、マジダル語(Magyar-nyelv)を公用語としている。マジダル語は、ウラルック語(Uralic Language)族のフィン・ウゴル語(Finno-Ugric)類派に属し、国の周りを他の言語を使用する国に囲まれているため、外国語を学ばなければ近隣の国々とコミュニケーションができない環境にあり、その言語環境は、孤立した言語といわれる日本の状況に近い。さらに英語との言語的な距離を考えても、英語と同じインド・ヨーロッパ語族の言語を使う国と比較して、孤立した母語との距離が日本語と同じように遠いという類似性もある。

本稿は、2015年に行った中高一貫教育を行うギムナジウム2校の、英語のみで授業が行われる英語イマージョンの授業見学を中心とした報告である。まず、EUの外国語教育の政策に根付いたハンガリーの外国語教育の背景を述べる。次に、主に2校の英語プログラムの内容、使用教科書、教員とのインタビューなどについて、最後に、今回訪問したハンガリーのプログラムから今後の日本の外国語教育が得られる示唆について論じる。勿論、島国である日本は、独自の環境に置かれており、中央ヨーロッパに位置するハンガリーのケースを横流しにすることはできないが、多様性に富むEUの一環を担うハンガリーの外国語教育の動向を視野に入れることは、多様性が高まる日本における外国語教育の今後、何かしらの示唆を与えるのではないだろうか。

2 ハンガリーの多様性と外国語教育の現況**2.1. 民族と言語の多様性**

マジダル人(Magyar)といわれるハンガリー人が、85.6パーセントであるハンガリーには、その他に、ロ

マ人 3.2 パーセント、ドイツ人 1.9 パーセント、その他の少数民族が 2.6 パーセント(不明 14.1 パーセント)を占める。1918 年、オーストリア＝ハンガリー帝国が崩壊した後、旧領土の約 7 分の 2 を失い、多数のハンガリー人が少数民族として国境外に残され、ルーマニア(トランシルバニア地方)、スロヴァキア、当時のユーゴスラビア(現在のセルビア)他の近隣国にも 500 万人を超えるハンガリー人が生活している。文化的にも多様な国で、宗教は、カトリックが 45.5 パーセント、プロテスタントのカルヴァン派が 12.6 パーセント、ギリシャ正教会が 1.6 パーセントである。首都ブダペシュトには、ヨーロッパ最大のユダヤ教会のシナゴークがあり、古代ローマ帝国の植民地であった頃からの温泉跡やオスマン帝国支配時代にトルコから入った浴場などの施設なども多い。

ドイツ系と、最近増えてきている中国系(2004年に最初の中国語とハンガリー語のバイリンガル学校を開校)の移民は、それぞれバイリンガル学校を持ち、これらの学校は非ドイツ系や非中国系にも人気があるという。ロマのためのバイリンガル校もペーチ市に開校されている。高等教育では、公立ブダペシュト商科大学(Budapest Business School, BBS)国際経営学部の東洋語研究センターで、日本語教育が行われ、同大学の商・観光学科(Faculty of Commerce, Catering and Tourism)では英語とドイツ語で授業が行われている。さらに、中央ヨーロッパの名門として知られる、ブダペシュトの中央ヨーロッパ大学(Central European University, CEU)でも、100か国以上の国からの出身者を含む学生に英語とドイツ語で授業が行われるなど、国内で使われる言語が多様化し、EUの多言語政策が社会に広まってきていることも中等教育での外国語教育に熱が入る一因であるだろう。

2.2. 初等、中等、高等教育システムとバイリンガル教育

ハンガリーの初等・中等教育は、現在、日本と同じように 12 年間である。初等教育は、4 年制、6 年制、8 年制から選択できる。4 年制小学校を選択すると、その後前期中等教育 4 年と後期中等教育 4 年のギムナジウムと呼ばれる中高一貫プログラムに進む。6 年制の小学校を選択すると、6 年間の中等教育の期間を持つギムナジウムに進む。6 歳から 14 歳までの 8 年制初等教育を受けた場合は、その後の選択肢が 3 コースあり、4 年間のギムナジウム、技術中等学校、職業学校の 3 つから選ぶことができる。(図 1)

ハンガリーのバイリンガル教育は、100 年以上の歴史を持ち、社会主義体制終結の 1987 年に、10 校のギムナジウムで、ロシア語、英語、ドイツ語、フランス語などのバイリンガル校が開設されて以来、その数は増え続け、現在では小中高合わせて 250 校以上が、何かしらの形でバイリンガル教育を採用している。これらのプログラムの 3 分の 2 は英語、3 分の 1 弱がドイツ語で他の言語はごく少ない。

初等教育	中等教育	新しい大学入学資格試験(兼、中等教育修了試験)、及び職業資格試験	高等教育
4年制小学校➡	中高8年ギムナジウム➡	大学入試資格試験➡	総合大学(3年)
6年制小学校➡	中高6年ギムナジウム➡		
8年制小学校➡	4年制後期中等教育 ギムナジウム➡		
	4年制技術中等学校➡	大学入試資格試験または訓練学校➡	技術系単科大学(3年)
	4年制職業中等学校➡	訓練学校、または職業資格試験➡	技術系単科大学(3年)、または高等職業教育(2年)

図1. ハンガリーの初等、中等教育制度と大学入学・資格試験

(脇田、2011 に基づいて筆者作成)

2.3. ヨーロッパ言語共通参照枠 CEFR (Common European Framework of Reference for Languages)を取り入れた新しいナショナル・コア・カリキュラム

2004年のEUへの加盟に向けてハンガリーでは、各種の法律や制度のEU基準への整合化が行われた。外国語教育の分野も、欧州委員会(European Commission, EC)が定めたヨーロッパにおける言語共通参照枠(CEFR)の導入に向けての整備が行われ、2003年に制定されたナショナル・コア・カリキュラムに、外国語教育がCEFRに基づいて行われることが盛り込まれた。教育政策のEU基準への整合化の過程では、義務教育も18歳までに引き上げられ、大学入学試験制度の見直しが行われ、従来の中等教育修了試験と大学入学資格試験を一本化した。

CEFRを取り入れたことで、外国語教育の目標レベルが上がり、中等教育で高い外国語教育を習得するためのカリキュラムが作られた。新しいナショナル・コア・カリキュラムでは、大学入学資格試験と中等教育修了試験が統一され、B1(場合によってはA2)、上級試験の場合はB2と定めた。職業/技術訓練学校(Szakközépiskola)でも、第1外国語の中等教育卒業レベルは、CEFRのB1からB2である。(CEFRのレベルについては、添付資料②を参照されたい。)

3 EU, ハンガリーのギムナジウム授業見学の報告

3.1 カルシエイ・フェレンツ ギムナジウム、バイリンガル中高一貫校(Kölcsey Ferenc Gimnázium), BudapestのCLIL

このギムナジウムは、数年前までは、英語のバイリンガル校だったが、現在はフランス語のバイリンガル校になっており、ハンガリー語とハンガリーの歴史以外の科目がフランス語とハンガリー語のバイリン

で行われている。ヨーロッパを中心に広まっている CLIL (Content and Language Integrated Learning) とは、他教科学習を通して外国語も学ぶアプローチであり、単に知識を与える学習法ではなく、生徒が能動的に考えたり、グループで話しあったりすることを重視している。英語が苦手な学習者も内容 (content) を目的とした活動によって、意識なく自然に外国語に親しむことができるというプログラムである。日本では、小学校外国語活動で着目され、最近では中等教育で、社会や歴史などの教科科目を英語で行う試みがあるが、教員養成などの課題もあり実際に行われている例はまだ少ない。今回見学した 12 年生の授業では、「World Civilization」と呼ぶ異文化理解の科目に CLIL を取り入れて行っていた。

カルシェイ・フェレンツギムナジウムの CLIL の教員は、アメリカで ESL の授業を教えた経験を持つハンガリー人の教員で、生徒の数は 8 名である。この日はプレゼンテーションで、発表者の生徒 1 名が、パワー・ポイントを使って、リサーチしたネイティブ・アメリカンの歴史と文化について 25 分程度プレゼンテーションを行った。生徒たちはそのあと、英語で発表内容について例を出して比較しながら質問をするなどしていた。教科書には CLIL 用の異文化理解の本で、主にイギリスとアメリカの文化についてリーディングやリスニング活動を行う前半と、地理、歴史、科学、物理、文学の科目に関連させた CLIL の活動が後半に埋め込まれていた。レベル、トピック、読み物や発問の量は、日本の大学 1 年生程度の異文化コミュニケーションの教科書とよく似ている。



カルシェイ・フェレンツ ギムナジウムの ERASMUS+ プログラムの報告 (筆者撮影)

この教員は、普通のイマージョン・クラスも担当している。普通クラスでは、メインの教科書と、教師が補助的に使う教科書の 2 冊を使って教えている。11 年生～12 年生は B1~B2 レベルを学ぶ人向きで、2 冊ともトピックはほぼ同じで英語のみで書かれている。教科書にはワークブックがついており、生徒はこれを使って自宅学習を行う。メインに使われる教科書は、英語教員達自身が、ハンガリーの大学入学資格試験向けのトピックや英語のレベルに合わせて作成し、イギリスの大手出版社から出版された。また、現場を熟知している中学と高校教員が中等教育修了試験/大学入学資格試験に合わせて書いているので、生徒は学校で使う教科書を把握しておけば、入試のための特別の勉強をする必要がない。

カルシェイ ギムナジウムでは、EU 内での教育、職業訓練、スポーツなどの交流を援助する「エラスムス・プラス (ERASMUS+) 計画」のサポートを受け、「レオナルド・ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci)」プログラムという職業訓練のプログラムに参加し、学校の玄関には、EU からの交換学生を歓迎する垂れ幕や交換プログラムの成果をまとめたポスターなどが展示されており、学校全体が交流活動に力を入れていることが窺われた。

3. 2. サントス・ヤノーシュ ギムナジウム、バイリンガル中高一貫校(Xantus Janos Gimnázium) , Budapest

3. 2.1. サントス・ヤノーシュ ギムナジウム Xantus János Gimnázium Xantus János Gimnázium)の8 年生の英語イマージョン

18名の8年生(日本の中学2年)のクラスの教科書はCEFRのA2~B1レベルのものを使用している。この学校の教員もメインの教科書の他、もう1冊の教科書から活動を取り出して使っている。この日のトピックは、スポーツで、生徒にあてて、好きなスポーツについて話をさせる。教員は、”Why? Can you tell me?”と質問するのみで、あとは生徒に説明をさせる。新しい表現の導入では、教科書の活動が終わった後、もう1冊の教科書を部分的に使い、生徒が英語の様々な表現に慣れるように工夫されていた。2冊の教科書での繰り返しの確認活動は、このあとの応用・発展活動への「足がかり」となり、生徒の不安を少なくする助けになる。

教歴が10年のこの教員は、ハンガリーのバイリンガル教員に必要な外国語教育の修士を持ち、C1以上の英語能力を持っている。イギリスに3週間の留学経験があるということだった。アクセントがあるが、はっきりと単語を発音するのでわかりやすい。教科書2冊とCDを使ってリスニングを行い、生徒に様々な質問をして、協同学習の機会も与えるなど、ノン・ネイティブの教員でも、十分、英語オンリーの授業を実践できていると感じた。

3. 2.2. サントス・ヤノーシュ ギムナジウム(Xantus János Gimnázium)の11年生の英語イマージョン

同じ教員の4時間目の小学校から英語を学んでいる11年生11名の授業では、カルシェイ・ギムナジウムの12年生と同じ教科書A(B1~B2レベル)を使用していた。この回は教科書の「仕事(Job)」についての章で、教員はまず、家族の仕事について生徒に質問した。その後は、CDを聞きながら、いろいろな形で本文に関連する質問を生徒に聞く。生徒の実際の生活に関することを、「何になりたいか?」「どうしてか?」「その仕事はどういう仕事?」などと詳しく聞き、自分のしたい仕事について説明させていた。これは、CEFR B1の「身近な話題についての説明や意見を言うことができる」ための活動である。

このクラスは、生徒が11名と少ないので、教員が生徒一人一人に質問して会話することができる。その後、隣の生徒とペア・ワークが行われていた。ハンガリーの生徒は日本の生徒と同じように教室内でおとなしい印象であるが、小学校から英語を始めたこのクラスは、早くから外国語や文化に触れたせいも、日本の高校や高校生の私生活などについて英語で積極的に質問してきた。



サントラス・ヤノーシュギムナジウム



11年生のクラス (筆者撮影)

この学校でも「エラスムス+(Erasmus+)計画」の「コメニウス(Comenius)」という、短期間の語学留学を行う教育・文化交流プログラムで、環境問題などのテーマについてスウェーデン、ルーマニア、ベルギーなどの生徒と協同を行い、報告会も設けている。職業訓練を行う「レオナルド・ダ・ビンチ(Leonardo da Vinci)」プログラムでは、スウェーデンの相手校のサポートにより、生徒たちはストックホルムのホテルで研修を受けたということだった。

3.3. ペトーフイ・シャンドール ギムナジウム(Petőfi Sándor Gimnázium) の外国語学科長とのインタビュー

バイリンガル指定校ではないが、英語イマージョン教育や、CLILも行っているこの学校の外国語学科の学科長と話をする機会を得た。大学資格試験の準備が一番の目的であるので、CEFR の B2 レベル達成のための教科書(カルシェイ ギムナジウムとサントラス ギムナジウムと同じシリーズ)を選んでいるという。外国語イマージョン・クラスを担当する教員は、外国語教育の修士、および C1 レベルの語学力を持っていないといけないが、資格をとるための政府や EU からのサポートを受けることができるのは数少ない教員なので、英語オンリーで教えるイマージョン・クラスの教員を集めるのに苦労するという。多くの英語の授業をイマージョンで行っているが、教員のレベルの差が出ないように、常にミーティングを持ち、ティーム・ティーチングで教えているそうだ。

現在の課題は、小学校英語とギムナジウムの連携がうまくつなげないことで、対策として、小学校で学んできたことも繰り返し反復して教えているそうだ。この問題は、日本の英語教育の今後の課題でもある。

CLIL の授業は、カナダで長く生活した C2 の英語力を持つと認められた非常勤教員が担当している。この学校でも「World Civilization」とよばれる異文化理解の授業で、ディスカッションやプレゼンテーションを行っている。バイリンガル指定校でなくても、この学校のように、CLIL や外国語のイマージョンを行っている学校もあるようだ。

3.4. 英語イマージョン授業の見学のまとめ

2校の教員達は、生徒中心のアクティビティ形式の授業を英語で行い、講義形式の授業はほとんど行

わなかった。むしろ、ペア・ワークなどの様々な実際の場面を設定したコミュニケーション活動の反復によって、生徒が「実際に使いこなせるようにする」ことを活動の中心に置き、CEFR の B レベルの「自立した使用者」を養うことを明確な目標として授業を行っていた。

また、生徒たちは、基本的な表現を使いながらも、それを組み合わせて新しいことを試していた。その様子から、「自分の言いたいことを伝えたい。」という意欲が窺われた。これはコミュニケーション能力を伸ばす観点から重要な姿勢で、「知っている規則や覚えた表現を使ってコミュニケーションする」A2(基礎)レベルの学習者から、「自立した学習者」である B レベルに移行するために必要なプロセスである。

今回の 2 校の教員は、コミュニケーション活動を多く取り入れた 2 つの教科書(テスト付き)を併用し、ワークブックも使用していた。彼/彼女らには、高い英語運用能力は求められるが、CD を使って教科書さえ使いこなせば、他のギムナジウムと同じように B1~B2 レベルの中等教育終了・大学入学資格試験というゴールに向かっているという安心感もあるだろう。日本でも、大学入試と中等教育の内容の統一、教科書のありかた、それを使って英語オンリーで授業を行うノン・ネイティブの教員の役割についてなど、取り入れていきたいところである。

4 おわりに

近年ハンガリーの若者が熱心に外国語学習に取り組むのは、他のヨーロッパの国々との行き来が増え、外国語が将来の生活や職業に必須である場合も多いという背景がある。中欧が、観光に経済を大きく支えられているため、バイリンガル校の学生の中には、大学で Tourism(観光学)などを学ぶ者も多い。最も人気がある第一外国語である英語のみならず、第二外国語教育も初等教育から積極的に進められている。EU の Lingua Programme は、EU のすべての市民が、中等教育終了までに少なくとも全加盟国の公用語のうち、母語以外 2 言語の運用能力を身に着けることを強調している。CEFR 作成にあたっての EU の理念は、「言語に象徴される EU の多様性こそ、EU の文化的な価値であり、力であり、EU のアイデンティティの基本である。」というもので、「EU のいかなる言語も貴重な財産であり、その理解に目覚めることこそ、本来、「不戦共同体」「平和維持機構」として発足した EU の発展のかぎである」(大谷、2006)としている。

日本でも EU の多言語・多様性の理念にならい、今後「英語プラス」の外国語教育に関心の目を向けるべきではないだろうか。勿論、ヨーロッパを中心に研究が進められている「共通語としての英語(English as a Lingua Franca)」を使って、非英語圏の人同士が交流できることには大きな意味があるが、それだけでは、それぞれの言語の裏に「隠れた文化」を理解し、本当の意味での文化理解や、コミュニケーションを行うことは難しいという場合も少なからずあるだろう。第 2、第 3 外国語を学ぶことで、日本の高校の生徒や大学の学生も、外国語学習に慣れ、「その国のことをもっと知って、実際にその国で使ってみよう」と思うのではないか。その時英語は、共通語として、第 2、第 3 言語のコミュニケーションを補足するツールにもなり得るだろう。

海外との交流プログラムの在り方についても学びたいところだ。日本の交流プログラムも、EU の「エラスムス・プラス(ERASMUS+)計画」の「レオナルド・ダ・ビンチ・プログラム」や「コメニウス・プログラム」のように、職業訓練や社会問題についての共同プロジェクトでの交流など、「目的を持った」交流プログラ

ムを増やすことにより、内向きといわれている生徒たちが、外国語や海外との交流に、より興味を持つ助けになるのではないだろうか。

英語、フランス語、スペイン語、中国語、韓国語の他に東南アジアやラテン・アメリカの国々の言語や文化紹介の講座を開講する国際言語文化アカデミアでも、「英語プラス」の外国語を学ぶ人も増え、多くの人が異文化についての知識を身につけ始めている。今後も、EUの理念に倣い、日本の環境やニーズに合った多言語・多文化理解プログラムの構築が期待されるだろう。

参考文献

- Byrum, Michael, “Civilisation/Cultural Studies: an experiment in French and English Schools”, in *Language Learning in Intercultural Perspective*, Cambridge University Press, 1998, pp. 32-44.
- コリン・ベーカー著、岡秀夫編訳 『バイリンガル教育と第二言語習得』大修館書店、1996.
- Council of Europe (2009) The CEFR and language examinations: a toolkit, http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Manuel1_EN.asp 2016.12.1.
- ヒダシ・ユディット 「ハンガリーの早期外国語教育」(2010) <http://www.blog.crn.or.jp/lab/01/21.html> 2016. 11.1.
- 平井清子、岡 秀夫、鈴木広子、河野 円、金丸英美、飯田深雪、蒲原順子、清水友子『グローバル社会に対応する英語教育のモデルの構築—海外の実態調査の分析から』科学研究費補助金：基盤研究(C)20520519 研究成果報告書』、2011.
- JACET バイリンガリズム研究会編『日本のバイリンガル教育—学校の事例から学ぶ』三修社、2003.
- Johnson, Robert, and Swain, Merrill ed. *Immersion Educaion: International Perspectives*, Cambridge University Press, 1997.
- 共同通信編、『世界年鑑 2016』、共同通信社、2016.
- Medgyes, Péter, and Nikolov, Marianne, “Research in foreign language education in Hungary (2006–2012)”, *Language Teacher*, Cambridge University Press, 2014, 47.4, pp. 504-537.
- Ministry of Education and Culture (2009) Hungarian National Core Curriculum. <http://www.nefmi.gov.hu/english/hungarian-national-core> 2016. 11.1
- 大谷泰照 「ヨーロッパ共同体(EU)の多言語政策 英語一極支配への対抗軸として」『英語展望』、2006、英語教育協議会、夏号、pp. 6-9.
- North, Brian, “Putting the Common European Framework of Reference to good use”, *Language Teacher*, Cambridge University Press, 2014, pp. 47.2, pp. 228-249.
- 笹島茂編 『CLIL 新しい発想の授業』三修社、2011.
- 脇田博文 「ハンガリー」大谷泰照編 『EUの言語教育政策』くろしお出版、2010、pp. 255-268.
- 吉島茂、大橋理恵訳編 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』(Common European Framework of Reference for Languages)朝日出版社、2008.

添付資料:CEFR共通参照レベル:尺度の目安

熟達した言語使用者 (Proficient User)	
C2	すべてのものを容易に理解し、自然に、流暢かつ正確に自己表現をすることができる。
C1	様々な種類の高度な内容を理解し、明確で詳細なテキストを作ることができる。
自立した言語使用者 (Independent User)	
B2	B1より専門的なこと、抽象的且つ具体的な話題が理解でき、説明することもできる。
B1	仕事、学校など身近な話題について標準的な話し方の場合、理解でき、単純な文で説明や意見も言うことができる。
基礎段階の言語使用者 (Basic User)	
A2	家族についてなど、基本的なことに関する文が理解でき、日常的な範囲なら簡単な言葉で説明することができる。
A1	よく使われる日常表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。

出所:吉島茂、大橋理恵訳編『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』(Common European Framework of Reference for Languages)をもとに筆者作成。